

中国地方における縄文のカメ棺

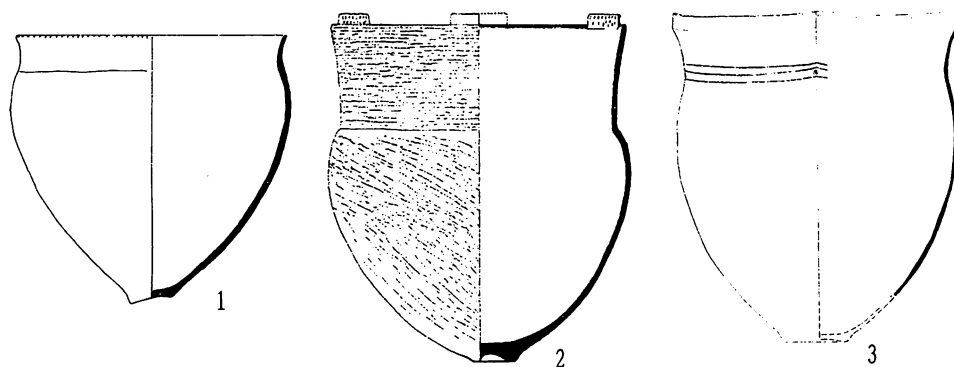
潮 見 浩

中国地方における縄文時代の埋葬遺跡は、1910年代からその本格的調査がはじめられ、岡山県津雲貝塚では166体以上、広島県大田貝塚では74体以上にのぼる人骨が発見された。そのなかで甕形土器のなかに人骨のおさめられたものは、津雲貝塚の数例のみである。戦後では、筆者らの関係した山口県岩田遺跡で、人骨は検出できなかったが、甕形土器の出土状態から、甕棺と推定したものが5例ある。また、山口県神田遺跡の埋葬地区では、「甕被葬」かといわれるものが報告されている⁽¹⁾。

今回賀川光夫教授から、中国地方の縄文時代のカメ棺についての原稿を依頼された。上記のカメ棺はいずれも報告ずみのものであるが、ここにとりまとめて、簡単な解説を付しておきたい。

(I) 岡山県笠岡市津雲貝塚例

津雲貝塚は、笠岡駅の東南約3kmの北に丘陵をおい南に名切の街道に面する緩傾斜面に位置し、標高約10mでかつては海浜に接した環境であろう。甕棺は、京大報告第5冊の清野謙次氏の発掘資料と、本山考古室要録に写真と実測図のある大串菊太郎氏の資料がよく知られている。このほか間壁忠彦氏の御教示によると、大串菊太郎氏の資料が別に取り、倉敷考古館に保管されている。ここでは、清野氏資料を第1号カメ棺、大串氏資料のうち前者を第2号カメ棺、後者を第3号カメ棺として紹介しておく。



第1図 津雲貝塚出土カメ棺

第1号カメ棺(第1図1) 1919年9月の清野謙次氏第2回発掘調査で出土したもので、第26号人骨のおさめられた甕形土器である。⁽²⁾口縁がわずかに西南に傾斜して埋没し、この甕の5分目以下の土中に頭骨を上にして乳児の全身骨が収められていたという。甕形土器は、口径約37cm・高さ約38cmで、肩部の張りのいちじるしい形態をなし、口縁から肩部にかけては横走する条痕でとのえら

れ、肩部以下には擦痕がみとめられる。口縁端には、刻目がくわえられている。

第2号カメ棺 (第1図2)⁽³⁾ 1919年7月の大串菊太郎氏第3回発掘の資料で、第6号乳児骨のおさめられたカメ形土器である。大串氏の報告には、⁽⁴⁾このカメを復原して原位置におかれた写真(第6図)があり、これから判断すると、『本山考古室要録』の写真(第31図)⁽⁵⁾と実測図(596)が大串氏の本資料にあたるものと考えられ、現在関西大学に所蔵されている。口径約40cm・高さ約46cmの肩部の張りのいちじるしいカメ形土器で、口縁から肩部にかけては横走る条痕がみとめられ、肩部以下は斜行する条痕によってとのえられている。口縁に長方形の突起があり、その内側に爪形にちかい刺突が2列にわたってめぐらされる。そのほか口縁端に刻目がくわえられ、口縁内側には1条の沈線がめぐらされている。口縁にこのような突起のある例は珍しく、『本山考古室要録』では、「口縁部の一側に小突起を三所に装飾的に付けてあった様であるが、一個は製作の当時まだ土の軟い時に取れた形跡があり、一個は後に欠け、現在一個だけ残ってある」とされているが、関西大学の『考古学資料図鑑』の石野博信氏の解説には、「『本山考古室要録』の実測図には3基の突起が復原してある。口縁端を観察すると2ヶ所に15cm余と5cm余の欠失部分があり、15cm余の部分に突起があったとしても3基にはなり得ない」とされている。いま大串氏の写真と関西大学の同品と考えられる写真を比較すると、石野氏の指摘する15cm余の口縁部の欠失部分はもとは欠損していなかったようである。実物を観察した結果ではないので、この突起の数は保留しておきたい。

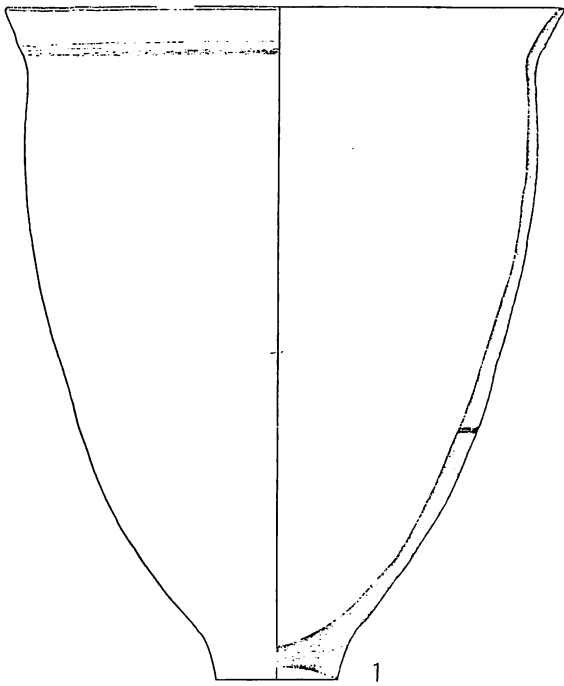
第3号カメ棺 (第1回3) 大阪大学解剖学教室にあった大串氏の発掘資料で、現在倉敷⁽⁶⁾考古館に復原して保管されている。『岡山の遺跡めぐり』161頁に、その写真がのせられている。口径約38cm・高さ推定43cmで、口縁直下がややふくらみ、肩部の張りのゆるやかな甕形土器であるが、欠失部分が多い。口縁から肩部には、二枚貝による条痕を横にめぐらしその上をなでて平滑にしており肩部以下は斜行の擦痕調整となっている。肩部には3条の沈線が波状口縁のカーブにそってめぐらされ、波頭部の沈線のあいだに刺突がくわえられている。口縁の内側には段がある。このカメ形土器は、後述の岩田遺跡の第2号・第3号カメ棺に共通した特徴を示している。

(II) 山口県熊毛郡平生町岩田遺跡例

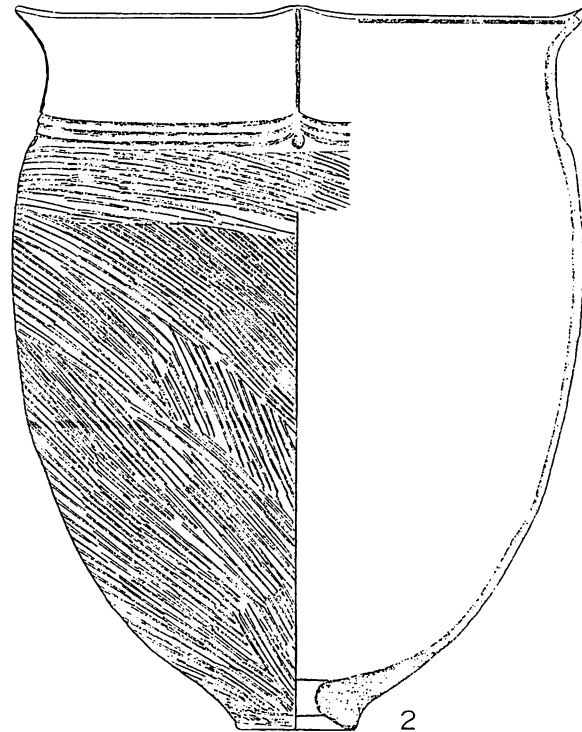
岩田遺跡は、山口県東南の熊毛半島西岸にあり、海岸に接した小扇状地に立地している。1952年と1955年の調査によって縄文時代から弥生時代の初頭におよぶ遺物が多数出土した。ここにカメ棺として紹介するものは、D地区とよぶ遺跡の最も海岸寄りの場所から出土しており、それは旧浜堤にあたる。5個のカメは、縄文後期の包含層のなかに埋められており、この地区は縄文晩期には埋葬の地域となっていたとみるべきようである。

第1号カメ棺 (第2図1) 1952年の第1次調査のさい、D地区のほぼ中央から、耕土下の赤土に口縁が接してほとんど横倒しの状態で出土した。口径33cm・高さ38cmで、外反してやや肥厚する口縁からゆるやかに内傾する甕形土器で、口縁部以下に擦痕がみとめられる。

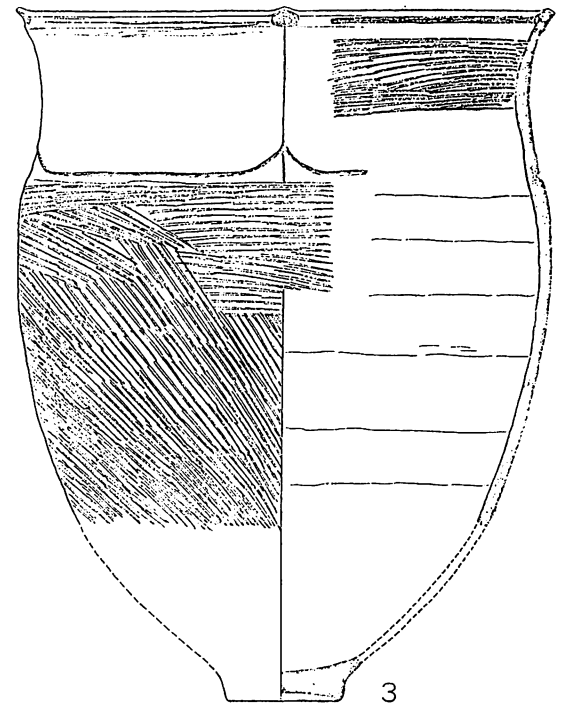
第2号カメ棺 (第2図2) 1952年の第2次調査のさい、D地区の南西端から、口縁を上にしたやや斜位の状態出土した。口径30cm・高さ42cmで、底部に3cm×3.5cmの楕円形の焼成後穿孔がみ



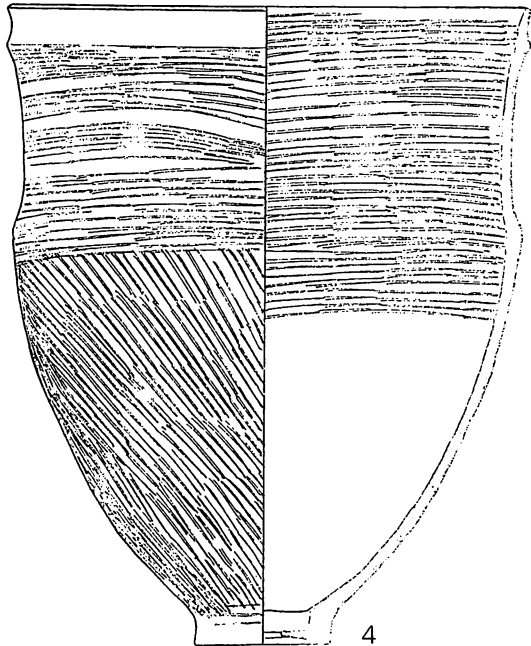
1



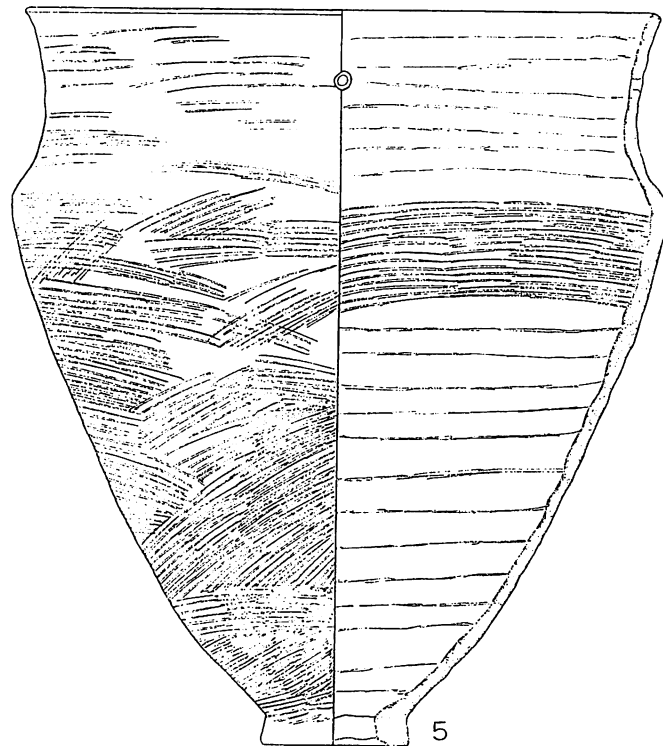
2



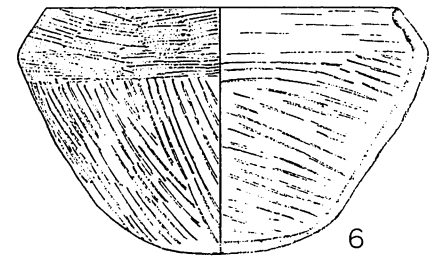
3



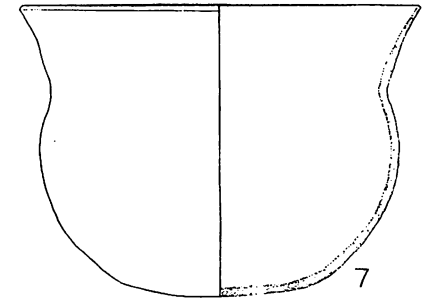
4



5



6



7



第2図 岩田遺跡出土カメ棺その他

とめられる。口縁は、ゆるやかな4個の波頭部からなる波状口縁で、内側に段がある。文様は、肩部に3条の段状の沈線をめぐらし、波頭部ではこれらが集って上向きになり、波頭部にむかって1条の沈線がつらなる。この文様の集約部の下端には、貝殻による刺突がある。口縁から肩部までは平滑であるが、それ以下は二枚貝による条痕が全面にみられる。

第3号カメ棺 (第2図3) 1952年の第2次調査のさい、第2号甕棺の北東3mの位置から出土した。口径30cm・高さ約40cmで、第2号カメ棺に共通した形態の甕形土器である。文様は、口縁部にふい凹線をめぐらし、肩部にも1条の沈線があり、この2つの文様は波頭部で縦の沈線でむすばれ口縁直下に指頭で押したかのような圧痕がある。この土器は口縁を上にした斜位の状態で出土しているが、下に位置した部分が多く欠失しており、当初から完全なカメとして埋められたかどうかについて、若干の問題をのこしている。

第4号カメ棺 (第2図4) 1955年の第3次調査のさい、D地区の北西寄りから出土した。この土器は、口縁を上にし約40度の傾斜をもって出土しており、さらにこの口縁と土器の周辺に数個の石が存在していた。口径30cm・高さ40cm、底部には径2cmの焼成後穿孔がみとめられる。口縁直下が肥厚して凸帯様の状態となっており、口縁から肩部には横走る条痕、肩部以下には斜行する条痕、さらに口縁内側の口縁から胴部にかけても横走る条痕がめぐらされている。

第5号カメ棺 (第2図5) 1955年の第3次調査のさい、D地区の北西端から口縁部を上にし約45度に傾斜して出土しており、第4号カメ棺と同様に周辺に数個の石が存在している。口径37cm・高さ42cmで、肩部の張りのいちじるしい甕形土器で、底部に焼成後の穿孔がある。肩部以下には斜行の条痕が全面にめぐらされている。なおこの甕の下に径1.5cm・深さ1.0cmの円筒形の土壙が検出され、その床面から丸底の土器2点(第2図6・7)が出土した。この土壙は埋葬に関連したものと考えられるが、いまのところその類例がなく具体的な性格をあきらかにできない。

以上の津雲貝塚3例と岩田遺跡5例の合計8例が中国地方における縄文時代のカメ棺である。津雲貝塚第1号と第2号では乳児骨がのこっており、しかも小児骨とされるものは、成人骨と同様に出土しているので、カメ棺におさめられた遺骸が乳幼児にかなり限定されたものといえよう。ところでこのような乳幼児の埋葬例として、帝釈観音堂遺跡では、押型文土器に伴う縄文早期の2例がある。これは特別な容器におさめられた痕跡はなかった。

津雲貝塚では、カメ棺も成人を埋葬した共同の墓地から出土している。岩田遺跡では人骨の遺存は全くみとめられなかったが、D地区の4m×9mの調査区の範囲に5基のカメ棺が分布しておりカメ棺のみの埋葬区と限定するには散在的であるので、共同墓地のなかにあったと推定すべきようである。とくに岩田遺跡のばあいは、D地が浜堤の上に立地したものと考えられ、これらは弥生前期の埋葬遺跡として知られる山口県土井ヶ浜遺跡や中の浜遺跡にも通ずる性格がある。

カメ棺の時期については、いずれも縄文晩期の前半に位置するものである。そのなかで津雲第2号カメ棺は、口縁に方形の突起がありその内側に爪形にちかい刺突がめぐらされる。この文様は原下層式の時期に下降する可能性がある。岩田第4号・第5号カメ棺もやや時期の新しくなる特徴がみられる。

- (1)山口県教育委員会（1971）『神田遺跡第1次発掘調査概報』。
 - (2)清野謙次・島田貞彦・梅原末治（1920）『備中津雲貝塚発掘』『京都帝国大学文学部考古学研究報告』第5冊。
 - (3)大串菊太郎（1920）「津雲貝塚及国府石器時代遺跡に対する二三の私見」『民族と歴史』第3巻第4号。
 - (4)末永雅雄編（1935）『本山考古室要録』。
 - (5)関西大学（1973）『考古学資料図鑑』。
 - (6)間壁忠彦・間壁霞子（1970）『岡山の遺跡めぐり』岡山文庫31。
 - (7)潮見浩・藤田等（1955）「山口県熊毛郡平生町岩田遺跡」『私たちの考古学』6。
- 潮見浩（1960）「山口県岩田遺跡出土縄文時代遺物の研究」広島大学文学部紀要第18号。